

# 安心して住み続けられるまちへ

## 市の進める浸水対策事業



氾濫した由良川（平成16年台風23号）



冠水した国道27号（平成30年7月豪雨）

大量の災害ごみ（平成25年台風18号）

救助される加佐地区の住民（平成16年台風23号）

由良川の氾濫で水没する車（平成16年台風23号）

### INTERVIEW



西市街地浸水対策促進協議会会長  
百田重男さん

高野川流域に住む人は、これまでから大雨が降ったら水がついて当たり前。仕方ないものだと思ってきました。浸水には慣れたもので、垂直避難や事前には畳を上げておくことなど被災時のノウハウがあります。それでも、一度災害が発生して床上浸水すると、元の生活に戻るまで3か月かかります。平成30年の7月豪雨の時には、側溝だけでも土のう袋700袋分の泥掃除をしなればなりませんでした。幸いなことにこの地域では災害時にニュースになっているような、堤防が決壊して家が流されるようなことはありませんが、早くこの状況が良くなってほしいと思っています。

高野川流域ではこれまで誰かに要望を言えば浸水の被害が軽減されるものとは思っていませんでした。しかし、近年は10年に1度の災害が何度も発生しており、さすがにこのまま浸水を当

り前のものにしてはいけないとの思いで協議会が立ち上がりました。私で2代目の会長になります。市は以前高野川流域がここまでひどいと思っておらず、西といえば由良川流域がひどいものだと思っていました。府知事や市長に災害の回数などのデータも示して説明したところ、すぐに治水対策に動いてくれました。

浸水対策事業はスタートしましたが、7月豪雨の被害を受け、住民の1人から府や市が実施する浸水対策事業の期間短縮を求める署名活動をしようという提案が上がります。市議会議員や地元住民の協力、夜の市でも活動した結果、約4,400人もの署名が集まり、事業期間の短縮につながりました。

浸水対策事業はこれからも進みますが、街並みが変わることも忘れてはいけません。国・府・市などいろいろな方が協力してくれている一方、立ち退きを余儀なくされる地元住民もいます。西舞鶴の大きな歴史を刻むこの事業を、写真などでも記録し、後世にも伝えていきたいと思っています。無事事業が完了し安心して暮らせることを願います。



のり面が崩壊した国道27号（平成30年7月豪雨）



高野川流域を視察する西脇京都府知事と多々見市長（平成30年7月豪雨）



浸水後の西地区（平成30年7月豪雨）



浸水する加佐地区（平成25年台風18号）



浸水する真名井商店街（平成29年台風21号）

近年、私たちが過去に経験したことのない大型の台風や豪雨が毎年のように発生しています。今年も7月には東海地方で、8月には九州地方を中心に豪雨災害が発生しました。

市でも、平成16年台風23号では由良川が氾濫し、観光バスが冠水した道路に取り残されるといった事態に見舞われました。バスの屋根で助けを求める人、そして救助される様子は皆さんも記憶に残っているのではないのでしょうか。その後も、平成25年台風18号や平成29年台風21号、平成30年7月豪雨など浸水や主要交通網の寸断など甚大な被害を受けました。

市ではこうした事態を受け、豪雨災害時の被害を最小限に食い止め、皆さんが安心して暮らせるよう、河川改修などのハード対策と水害などからの避難を支援するソフト対策が一体となった防災・減災事業に取り組んでいます。平時では、防災・減災への意識が薄れるのも事実。3年前の災害でさえ記憶の風化が始まっている人もいます。ではないでしょうか。写真を通して過去を振り返り、防災への意識を再確認していただくとともに、SDGsの11番目の目標にも掲げられている「住み続けられるまちづくりを」達成に向け取り組んでいる、浸水対策事業について紹介します。